



11月11日にイグナチオ教会のヨセフホールで、イエズス会の堀江節郎神父の講演がありました。堀江神父はブラジルのロライマ州東部のノーボパライズという、人口300人の森の中の村で宣教活動をなさり、その報告講演でした。ロライマ州は赤道の北にあり、アマゾンの北の端になり、日本の6割の広さに50万人の人々が住んでいます。その約半分の土地に、250以上の言語の、300以上の部族先住民のインディオが住んでいます。100年前からほとんどの部族がカトリックに改宗しています。村人はシュロの屋根の立派な司祭館を建ててくれ、そこを礼拝堂としても使う、質素な生活です。イエズス会はインディオの独自の靈性を尊重し、彼らの権利を守り、援助するミッションを展開し、堀江神父はもう一人の神父と2名のシスターと共に、草原、森、山の交錯しあつた自然環境の中で、雨期、乾季はあっても猛暑、痛暑の地、しかもインフラが不十分な地で、そのミッションに従事しています。

24日にアマゾンの森から堀江神父が我が家に来て下さいました。まずベランダから夕暮れの紫色の富士山を見ていただき、手巻き寿司、酢の物、金平牛蒡、ナメコ汁、緑茶、餡子等、日本の味を味わっていただきました。私達は2000年にブラジルに旅して、堀江神父にアマゾンの司教区を案内していただき、多くを教えられました。アマゾン川に貧しく、ひっそりと暮らすインディオの姿を見たものでした。

ブラジルは豊かな資源を持つ国故、巨大な世界規模の経済的利害にさらされ、生命体とその環境が危機にさらされています。インディオも国民として保護され、義務教育でポルトガル語の読み書きは習っていても、日常はワピチャナ語を話し、独自の伝統文化に生きています。堀江神父は、彼らの生き方を尊重し、主の祈りや使徒信条などを自らの言語で唱えられるよう、翻訳にも取り組んでいます。月に5000キロも運転を担当し、点在するインディオの共同体を繋ぎ、彼らの自立した生活を守り、育てる活動をされていますので、多忙な日々ですが、疲れを見せず、キラキラと目を輝かせながら、熱心に、しかも、ソフトに「アマゾンの森の心、すなわちインディオの人々の心、生き方」に寄り添って、話される姿は昔のままでした。今回、一番興味深いお話は、「インディオの靈性」についてでした。土地を私有地とは考えず、森に木を植え、助け合って直接民主制のような共同体のシステムで自然と一体化して生きている。衛生面や自然の厳しさで病気になりやすい。カトリックになってもインディオは、キリストの十字架による赦し、復活の命を理解していないようだ。けれどもカリスマ性のある人が祈り、癒されてきた伝統がある。深い祈りを捧げる生き方は尊重され、守られなければならないが、キリストの愛を信じて生きる信仰を持ってほしい。そういう彼らと一つの家族のように共に生きることを何よりも喜びとする堀江神父でした。キリストの福音に駆り立てられている、と話されました。



スリーショット(合成写真)

7時に堀江神父を紹介してくれたブラジルの小井沼真樹子宣教師から電話があり、喜びが重なりました。アマゾン川の河岸の町で土俗の踊りを見て、つい私も一緒に踊ったことを堀江神父は覚えておられ、楽しかったね、クリスチャンは素朴に、素直に、信仰に生きたいね、とお話は尽きないほどでした。